

寧元豐の новаから北宋末期蔡京の通商鹽法に至るまでの問題點にも觸れる。

趙紀彬氏の近業をめぐって

小倉芳彦

批林批孔運動が高まって以後、趙紀彬氏は『關於孔子誅少正卯問題』（一九七三年九月）、『論語新探』（第三版、一九七六年三月）などで、舊來の文字學訓詁學の成果を細密に利用しつつ、春秋過渡期における孔子の言説の意味づけに大膽な論定を加えるという特異な學風を展開している。こういう趙氏のような學風を、われわれは中國學術史の流れの中でどう受け止めたらよいのか。學會の研究報告の體は成さぬと思うが、この機會に諸賢のお教えを請いたい。

クシャン王朝とガンダーラ美術

小谷仲男

最近、アフガニスタンの西北部、アム河岸でアイ・ハスムとよばれるギリシア人都市址が発見された。目下、フランス調査團の手で發掘がすすめられているが、その第一〜四次（一九六五—一九六八）の調査報告が *At Khanoum I* (MDAFA, XXI, Paris 1973) と

して出版され、また年次報告も *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions* に逐一發表せられ、興味ぶかい成果がうかがえる。

遺跡の規模は、東西 1.6Km、南北 0.8Km の平地（下市）と、小高い丘アクロポリス（上市）とからなり、平地には官衙ふうの大きな建物、廟、神殿を中心に、周邊に半圓形劇場、競走場、體育館、邸宅などがあり、コリント式石柱、屋根瓦、大小の彫塑、貨幣、ギリシア語碑文などはみな真正ギリシア人の生活をものがたる。

この都市の創建については、アレキサンダーがアジア遠征中にたつた *Alexandria Oxiana* とするか、あるいはセレウコス一世の時代とするか、各説があるが、いずれにせよ B. C. 300 年以前の創設で、しかもその主人公がキネアス *Kineas* というテッサリア出身のギリシア人であったことも碑文から推定されている。

ここで私が關心をいだくのは、このギリシア人都市がいつ、どのようにして滅んでいったか。中國史書の大夏を征服したという大月氏との關係、あるいはクシャン王朝、さらにはこのギリシア文化とガンダーラ佛教美術との關係である。

吐蕃占領初期の敦煌文獻について

土肥義和

敦煌出土の漢文文獻は、吐蕃が敦煌を占領した七八七年（別説に